

茶の湯 文化学会 会報

第116号 / 2023年3月28日
発行 茶の湯文化学会
京都市左京区下鴨森本町15
生産開発科学研究所内
〒606-0805
TEL 075-702-9270
FAX 075-702-9314
E-mail:chanoyu@oregano.ocn.ne.jp
<https://www.chanoyu-bunka-gakkai.jp/>

倉澤行洋元会長を偲ぶ

影山純夫

茶の湯文化学会創立時の副会長であり二代会長を務められた倉澤行洋先生がお亡くなりになりました。行年八十八歳でした。筆者はお亡くなりになる数日前にお目にかかりましたが、まだまだしな

う。先生御自身も、早くから日本や東洋の精神文化への関心が強く心茶会への入会が、その学的研究への願望に油を注ぐことになったと書かれています。

ければいけない仕事があるのだ、まだまだ長生きするのだとおっしゃっており、こんなことになるとは思っていませんでした。茶の湯文化研究だけでなく、広く日本の伝統文化研究にとって大きな損失であり、本当に残念なことです。

大学卒業後は神戸大学文学部に奉職され、ニーチェやショーペンハウエルの哲学に関する論文を発表されていましたが、次第に日本の伝統芸術の思想に関する論文を発表されるようになりました。早くは世阿弥の著作に注目され、世阿弥の思想についていくつかの論文を発表されていたように思います。その後は茶道の研究に力を入

れたのはいつか伺ったことはないのですが、京都大学の心茶会への入会が、後の茶道研究へのきっかけとなったのは間違いないでしょう。

れられるようになり、珠光の茶道思想についての論文の発表と、その纏めとしての珠光関係書の出版もされることになりました。

しかしこのような茶道研究とその成果の発表をおこなう中で、茶道研究が社会的に評価がなされないことを感じられたことから、この状況を打破するためにどうすればよいかを考え、その結果として茶道の研究をする学会を作ることと考えられたのです。学会を作ることによって、茶道研究が他の学問の研究と同様に価値のあるものであることを学界だけでなく社会に認知させ、ひいては茶の湯そのものが優れた文化であることを認知させようという思いがあったのです。

そこで学会を作るべく活動を始められたのですが、色々な困難が待ち受けていたようです。どんな学会でもその創設は簡単なもので

はありませんが、茶道が遊芸―趣味の世界―と見られていたことや、茶道実践者との関係をどう考えるべきかという問題の存在は、その活動の障害となったようで、そのことについては苦勞話としてよく話しておられました。その努力の結果は皆さんがご存じの通りです。

先生が神戸大学退職後は宝塚造形芸術大学に移り、大学院に伝統芸術コースを新設するべく努力されたことも、特筆すべきことといえるでしょう。このコースでは学問研究だけではなく実践をも重視することから、茶室の設置にも努力されこれも実現しています。この大学からは茶道や華道など伝統芸術の研究を志す研究者が生まれています。そしてこのコース修了者の研究等の継続を促すとともに、伝統芸術研究を盛んにするために国際伝統芸術研究会も創設されています。この国際伝統芸術という名称にも先生の伝統芸術に対

する熱い思いが込められていると思います。宝塚大学（宝塚造形芸術大学）は数年前に退職されたが、その後も小人数による伝統芸術に関する研究会を続けられており、そこで示される博識や適切な指摘は参加者にとつての宝であつたように思います。

先生は茶道について、広く豊かな文化的表現と深遠な哲理を兼ね備えた東洋文化の精華であり、自然本位主義へ向かう次の時代の代表として茶の文化があるのである、茶道は過去の文化であるばかりでなく、次の時代に輝きをます将来の文化であると考えられておられました。そういうお考えからでしょう、茶の湯文化学会が茶の湯の歴史研究に偏りすぎることを中心し、茶道の総合的研究を進めるべきだとしておられました。そのため茶の湯文化学会は会則で茶の湯についての総合的学術研究をおこなうとし、『茶の湯文化学』第一号の「創刊にあたって」のな

かに「諸分野の研究の交流を促進し、かつ総合的研究の視座から茶の湯文化に肉薄することによって、（茶の湯文化）解明への道をひらこうとするものである」との一文が書き込まれたのではないかと思います。また筆者に茶の湯の総合的研究を主題とした近畿例会を開くように勧められたこともありました。この例会は実現し、筆者も神道と茶の湯との関係のようなことを話したように記憶しています。

先生は中国や韓国の茶文化研究者との交流も盛んに行っておられました。特に中国へはよく足を運び、茶文化研究者との意見交換を行い、かなり深い関係を築かれていたようです。茶道という言葉の使用に関する中国の研究者との意見の違いなどについてもよく話しておられました。中国の国際茶文化研究会や湖州陸羽茶文化研究会などの役員を務められており、中国と韓国で毎年開かれていた世界

禪茶文化交流大会ではしばしば研究発表をされてきました。中国では日本の茶文化研究者の代表者としてみられていたと思います。

先生は中国での茶文化調査の旅を重ねることで「いくつもの旅を重ねるうちに、私たちの心の中にある希いが生まれてきた。それは茶をもつて朋友となる、そしてさらに進んで茶をもつて知音となるということであつた。それは祈りと言つてもよい。……私たちは、茶をもつて国家・民族・人種・貧富の別を超えた、清く高き交わりが生まれることを希つた。その希いが茶をもつて知音になるにまで高揚した」とある書の中で書いておられます。さきに記した世界禪茶文化交流大会では、毎回日本参加者の代表として挨拶をされましたが、いつも皆さんとこの茶を通じた知音になろうと書いておられました。今日日本と韓国や中国との関係は良いとはいえません。しかし、倉澤先生の願われたように、

今こそ茶を通して韓国や中国の人達と知音になることが求められているのではないのでしょうか。

追悼

去る一月二十一日に、二代会長倉澤行洋先生が逝去されました。倉澤先生は長年にわたり、本学会を支え、お導きくださいました。

多くの思い出が去来いたします。理事・幹事より追悼の言葉が寄せられました。

「倉澤行洋先生をしのぶ」

熊倉功夫

倉澤先生は茶の湯文化学会創設時の主要メンバーとして、学会誕生に大きな役割を果たされた。学会が準備される段階では、中核メンバーに二つの世代グループがあった。一つは昭和初期生まれの先生方で、昭和二年の中村昌生先生、三年の林屋晴三先生、五年の

村井康彦先生、さらに九年の倉澤先生である。もう一つのグループは昭和十年代生まれの筒井、竹内、赤沼、谷、熊倉のグループで、この二つのグループの間には、問題意識や学問的背景もかなり異なるところがあつたのを、いわばその中間的に位置する倉澤先生が緩衝材の役割を果たされて、上手に学会設立にもつていかれたように思う。

先生から私が学問的に大きな影響を受けたのは、処女作の『対極桃山の美』である。先生の名著『藝道の哲学』も重要な著作であるが、桃山の美意識をわびと絢爛豪華の美の対立に求めた明快な論理と多くの図版を使った『対極桃山の美』は清新で説得力があつた。

先生は研究者として優れていたばかりではなく、教育者として抜群の存在である。神戸大学在職中から多くの研究者を育てられたが、宝塚大学に移られてからも茶の湯研究者を教育し、先生のもの

とで茶の湯研究の博士号取得者がつきつきと現れた。茶の湯学界にとって大切な業績である。

先生とお茶でご一緒することは多くなかつたが、名水だての茶事でご一緒したことは忘れがたい。清らかな木地の釣瓶の水指がとも印象的であつた。また利休四百年忌の裏千家の茶事ではお話をとめられ、正客の吉田光邦先生と対照的でなかなか興味深かつたことを憶えている。

最後に忘れてはならないのは、先生がたびたび中国を訪れ、学問的交流をはかれたことで、学会の研修旅行を引率されることも申しあげた。ご冥福をお祈り
合掌

「倉澤先生を偲んで」

高橋忠彦

倉澤行洋先生の訃報に接し、哀悼の念に堪えません。先生は哲学に足を据えた茶の湯研究に於いて高名な方でありますので、私の研

究分野とは、さほど接点がありませんでした。茶の湯文化学会創設の時より、先生が副会長として活躍されていましたので、私も初めてその警咳に接する機会を得た次第です。その後、先生が二代目の会長になられた折、突然のお電話で、国際交流を管掌する副会長を担当せよとお話をいただき、非力を顧みずにお引き受け致しました。それ以来、本会最初の海外研究会として湖州を訪問したのをはじめ、河北、台湾へと訪問の回を重ね、倉澤先生には、毎回団長を務めて頂き、その折には、茶文化に関する先生の学識を直にうかがうことができました。先生は、茶の湯文化学会会長に就任されて以来、国際交流だけではなく、茶文化の多様かつ総合的な研究を進めることに精力的に努められ、意図して学際的な茶文化研究を目指されたように思えます。それは、日本の学術世界で、茶の研究にふさわしい敬意が与えられるべきであ

るとのお考えと表裏一体のものであったでしょう。先生のリーダーシップは、茶の湯文化学会に独特の個性を与えたものと思われます。心より御冥福をお祈り致します。

「清風万金秋」

船阪富美子

倉澤先生とのご縁は、私が神戸大学大学院に入った時に始まる。担当教官となっていた影山純夫先生も、前年度に退職された倉澤先生の後任として来られたばかりであった。当時、倉澤先生は茶の湯文化学会の副会長をされ、影山先生も理事としてご協力されていたこともあって、私も会員となるようお願いいただいた。ある時、影山先生と三人になり、倉澤先生が神戸大学文学部の助手をされていた頃に、影山先生が同学部に入学されて以来のご関係であったとうかがった。「船阪さんは、孫弟子になるね」「では、大

師匠と呼ばせていただきます」と調子に乗って申し上げた。お目にかかるたびに、直接の弟子でなくとも、お心にかけてくださることが感じられ、親しくご指導いただけることが有難かった。

またある時、倉澤先生が、思文閣のところに、西田幾多郎先生の書がまとまってあって、今ならまだ少し残っているから如何か、と影山先生にお勧めになった。たまたま同席していた私も写真を見し、細く勁く暢びやかな墨書「清風万金秋」に、朱文方印「寸心」のあるのをいただくことになった。文人趣味の煎茶では大切な「清風」の一語が気に入る、陸游の七言律詩「齋壁に題す三首」の其二に「北窓に睡起して眼を摩挲し、更に覚ゆ清風の万金に直するを」とあったのも思い出され、早速、無地のベージュの絹地に、黄色の細い筋の入った明朝の装潢に仕立てていただいた。後に、「船阪さんの選んだものは良いものだった。

た。本当に良いものだった。あなた、あれでお茶会をなさいますよ」とおっしゃるので、「お茶会はよう致しません、いつでも持つて上がります」と申し上げたことが、一、二度あった。

あらためて倉澤先生のたずまいを思い起こすと、ご一緒させていただいたときが、私にとって「万金に値するとき」であって、まさに「清風」を感じていたのだと思われた。 合掌

参考・

『神戸大学学報』No.四八六、庶務部庶務課、一九九七年三月、六三二～四頁（「定年退職教授からの寄稿文」学歴・専攻・略歴・寄稿文）。

『近代』第八十二号（「特集」倉澤洋教授・堀信夫教授退官に寄せて）、神戸大学「近代」発行会、一九九七年十二月（信太周「倉澤洋教授を送る」、ほか）。

『五〇周年記念誌 御影・六甲

の半世紀―神戸大学文学部の歩み―』神戸大学文学部、一九九九年、一二四～七頁（助手・講師時代）。

「椿と水仙」

岡本文音

倉澤先生には、社会人学生として入学した大学院の修士課程・博士課程をとおして、たいへんお世話になりました。わたくしは研究の仕方や論文の書き方など、何も分からないうえに、入学当初より、突拍子もない研究テーマを掲げておりましたので、さぞ厄介で面倒な学生と思っておられたことと思います。にもかかわらず、終始温かく見守ってください、適宜、要となる貴重なご助言やご指導、そして励ましのお言葉をくださいました。なんとか論文を書き上げることができましたのは、ひとえに先生のご指導の賜で、ございました。

令和二年のお正月、まさにコロ

ナ禍直前に、友人たちとご自宅を訪ったのが、倉澤先生にお目にかかった最後となりました。

通していただいた和室の床には、倉澤先生の師であった久松真一先生の書が掛けられ、床の上には、一本の清楚な水仙が鶴首の花入に入れて置かれ、くわえて籠の花入に生けられた赤い椿の花が一輪、床柱の花釘に掛けられていました。その床の設えを拝見したとき、久松先生の書で迎えてくださったことに感激しつつも、花入が二つあることに当惑したことを鮮明に覚えております。

その日も先生は手ずからお茶を点てくださり、美味しいお茶をいただきながら楽しい時間を過ごさせていただきましたが、ニコニコとお話になれる先生から、ご質問がありました。「椿と水仙とをとり合わせて茶花に用いることはよくありますが、多くは水仙の足許に根締めのように椿を挿してあり、花の位置は椿より水仙のほ

うが高く生けられています。茶花は自然の姿を映して生けるのが良いとされていますが、自然では、

椿は水仙より高い位置で花が咲いているのに、これでは自然の姿に反していませんか。あなたはどお思いますか」と、概ねこのような内容でした。ご質問はわたくしに対してでしたが、哀しい哉、窮して答えることができませんでした。その後、庭に咲く椿と水仙を切って茶花とするたびに、先生のお言葉を思い出しておりますが、出された宿題に、いまだ答えを見いだせずいます。

椿と水仙の美しい季節に逝かれた先生。当たり前のことのように扱っていることにも、常に疑問を持つ姿勢を忘れてはいけないこと、そして考え続けることを止めてはいけないことを、最期に改めて教えてくださったようです。

理事会

令和四年度第二回理事会が、二月四日(日)午後二時よりZoomミーティングで行われた。理事十六名が出席し、以下の議題について討議がなされた。

一、各担当理事より事業報告
二、令和五年度総会・大会について(ブレ創立三十周年)

三、役員選出・役割分担
四、会誌・会報について
五、その他、

第一議題では、令和四年度の各地例会について、出席の担当理事よりそれぞれ報告が行われた。

第二議題では、令和五年度総会・大会について話し合われた。令和五年度は当学会創立(平成五(一九九三)年十月十六日創立)三十周年を迎える。前例ではその十月

を過ぎた後の令和六年開催予定の大会が創立三十周年記念大会となるが、令和五年度については六月

開催予定の大会も(ブレ)三十周年とし、令和五年度・六年度両年度において創立三十周年記念行事を行うこととする。日程は、令和五年六月十日(土)・十一日(日)の両日とする。シンポジウムの

テーマは「江戸の茶の湯」として、江戸を中心とした茶の湯、江戸時代に出版された茶書等も内容に含んでいくこととなった。会場は東京で、Zoom配信とのハイブリッド開催も視野に入れ、WiFi環境の整ったところを検討する。見学会は、テーマに沿って護国寺が提案された。東京の理事を中心に大会委員会を組織し、今後の運営を進めてもらうこととなった。また、研究発表者を募集し、発表要旨を提出してもらい、次回の理事会にて発表者を決定することとなった。

第三議題では、役員選出・役割分担がなされ、副会長は三名までとされているので、理事会後速やかに一、二名の候補者に会長から

連絡を取り、内諾が取れたら候補者として理事会に推薦する方針。

監査に影山純夫前理事（会員）、新任理事に仲隆裕氏（京都芸術大 学歴史遺産学科教授・庭園史・庭園修復）、吉江勝郎幹事を推薦し、総会での承認を得ることとなった。新任理事の役割分担は、仲氏は学会誌、吉江氏は従来通り北陸例会担当。幹事に、降矢哲男氏（京都国立博物館学芸部調査・国際連携室長（兼工芸室））が推薦され、理事会で承認された。

矢野新会長のもと、学会の一層の充実を図るため、幹事の役割分担を再編成し、大会・例会・学会誌編集・会報編集などに参加していただくことになった。会誌編集には福島修理事が新たに参加、また幹事から加藤祥平氏・木村栄美氏・下村奈穂子氏・降矢哲男氏（令和五年度より）が参加される。岡本文音氏・松田剛佐氏は留任。これら幹事は従来の「文献目録」作成のほか、編集委員会からの指示に

より、会誌編集にも関与していた

だく予定。なお中村幸理事・八尾嘉男理事・依田徹理事は引き続き「文献目録」作成を担当していた。会報編集は、飯島照仁・中村幸・船富富美子の各理事の下、幹事の岡宏憲氏・後藤さち子氏・砂川佳子氏・藤田若菜氏に参加していたことになった。例会についての理事・幹事の異動はなし。なお、岩崎理事は東海例会所属となった。

第四議題では、会誌について、山田編集委員長より、会誌三十九号の進捗状況が報告された。印刷会社変更に伴い、今回より校閲がなくなり、さらに修正漏れの箇所があるなど、まだまだ不慣れで行き違い等が生じている現状である。学会誌の質を保つためにも、執筆者による原稿入稿時の注意事項の徹底、会誌編集委員による入稿時と初校時の確認を行うこととなった。また、「原稿入稿時の注意事項」をHPの「投稿原稿募集」欄に掲載することとなった。

欄に掲載することとなった。

会報について船阪編集委員長より会報一一五号の進捗状況が報告された。また、矢野会長より学会創立三十周年を記念して、歴代の副会長に關連原稿の執筆を依頼し（千字程度）、一一七号（二〇二三年六月発行）から順次掲載する提案がなされ、承認された。対象副会長経験者は、村井康彦・戸田勝久・小泊重洋・高橋忠彦・筒井紘一・影山純夫・神谷昇司・谷端昭夫・竹内順一・田中秀隆・中村修也の十一氏。

第五議題では、登録無形文化財については、来年度から文化庁の移転が加速されることから、当学会としても文化庁との協議が加速されると予測すると、会長から報告があった。広報活動について、依田理事作成のチラシを、SNSに貼り付けたり、例会会場にて配布するなどする。また、フェイスブックの活用を、中村幸理事・依田徹理事に

依頼することが確認された。

例会

東京例会

（令和四年九月二十四日）

「備前肩衝茶入「布袋」の賞玩と伝承―十六・十七世紀の文献史料から―」

荒井欧太朗

千利休は、唐物写しの備前肩衝茶入「布袋」を取り上げるに際し、白地金襴仕覆に入れて用いた（『宗湛日記』天正十五年六月十四日）。これは備前焼の肩衝茶入を、格式で優る唐物肩衝に見立てた趣向である。これにより「布袋」には、唐物と同等の格式が生じた。

利休の死後、「布袋」は太田美作が所持していた（『松屋日記』慶長四年二月二十二日）。「布袋」を実見した松屋久好は、利休由来の備前茶入が、現代の備前茶入と似ていることに驚きを感じたと思

われる。また備前茶人に過分な裂地の仕覆を用いていることが、「布袋」銘の由来とする話型の伝承が、慶長四年の時点で成立していたことが判明する。太田美作の手を離れた「布袋」は、十七世紀初頭には堺の伊丹屋に移動したと思しい。

元伯宗且は「布袋」の付属品を誂えて書付をし、祖父利休の所持品として「布袋」の価値を認定した。なお江岑宗左の覚書には、「布袋」は登場しない。その後、随流斎宗佐が堺の伊丹屋宗不の許で「布袋」を実見し、絵図入りで記録を残した(『随流斎延紙ノ書』)。元禄三年の利休百回忌を控えた随流斎は、堺の遺物を記録する必要を感じたと考えられる。随流斎が記載した「布袋」銘の伝承は、従来の話型と異なり、外部の伝承に依拠すると考えられる。また江岑の覚書に「布袋」の記載はなく、随流斎が「布袋」を再発見するまで、江岑以降の千家では「布袋」

の伝承が途絶えていた可能性がある。

「没後百九十年 木米という人について―木米の生涯に関する3つの論点―」
久保佐知恵 安河内幸絵

木米(明和四年「一七六七」―天保四年「一八三三」)は江戸時代後期を代表する京焼陶工であり、優れた文人画家だった。このたびは、彼の生涯の中で従来説と少し異なる木米の姿が見えてきたので、3つの論点について近年の研究も参照しつつ、文献資料を基に、あらためて検証し提示した。

まず、木米の作品や箱書に見られる号「聾米」や「九々鱗」が、いつごろから使われ始めるのかにも関わる「①木米が耳を聾したのはいつか」について考えた。木米が耳を聾したのは従来説の五十年代を大幅に遡るおそらく三十代であり、『陶説』と出会った頃にはすでに耳を悪くしていた可能性がある。

る。

それでは「②木米が作陶を始めるきっかけになったと解釈されてきた木米と『陶説』の出会いはいつ」だろうか。木米が『陶説』と出会ったのは、必ずしも木米が木村兼葭堂を初めて訪問したという従来説の寛政八年(一七九六)三十歳に限定されず、三十歳から、兼葭堂宅に寓した可能性のある同十二年(一八〇〇)三十四歳頃までの間と考えた。

それでは「③木米が陶業に志したのはいつ」だろうか。「上奥殿侯書」の記述を再検討すると、木米が陶業に志したのは三十歳ではなく二十代半ばまで遡る可能性もあり、かつ『陶説』に出会う前から既に作陶に携わっていた可能性があることを提示した。

(令和四年十一月二十七日)

「益田克徳の茶とその周辺」
その四 根岸と御隠殿
神保乃倫子 八木京子

益田克徳が旧下谷区根岸に居住したのは明治十二年頃からと思われる。今回、私共は克徳の本邸と別邸の場所並びに茶室名を特定し、本邸が「撫松庵」で別邸が「無為庵」であった。そして杉本文太郎『茶室と茶庭図解』と近藤正一『名園五十種』に掲載されている夫々の茶室の写真と、安田松翁や高橋箒庵の茶会記録を参考に、両茶室の間取りと庭の様子を考察した。本邸の茶室は主屋の端に接続して建てられ、庭は伝統的な露地ではなく、樹木が生い茂り水の流れもある野趣溢れる自然を写した庭であった。茶室内部は、四畳半敷下座床で点前座に向壁があり、客座とは襖で仕切られた三畳向切道安囲と考える。一畳半は主屋へ繋がる畳廊下となっていた。外壁内に元の部屋の名残が

見えるので、茶室は移築であろう。別邸の茶室も主屋の端に接続しており両茶室共に「付け茶室」である。松翁の茶会記には本邸と同じ三畳向切とある。又『益田克徳翁伝』口絵写真にある「撫松庵」が、

本邸に在った克徳の「田舎家」と思われ、それは間口二間の方丈で造りは「粗末な小屋」「草庵」であつた。しかし近代茶道史では、

箒庵が記述した「田舎家」という言葉からは古民家が連想され、克徳の「草庵」は誤解された儘である。ここで催された箒庵の初参席の年は明治二五年であつたことも

当時の状況と箒庵の記述の比較から推察できた。さて、克徳は寂蓮法師筆大阪切を所蔵していた。それは一連の漢詩と和歌が組になっているのに、箒庵は和歌だけを取り上げて「克徳は小倉山に擬えて借景の庭を造つた」と記述したが、大阪切の内容はそれとは全く異なり、夕暮れに友を思う寂寥感であつた。戊辰戦争で幕府軍とし

て戦つた経歴を持つ克徳は、生き残つた者としての深い寂寥感を抱いていたと想像出来る故に、大阪切の内容はまさしく克徳の心の中を象徴しており、その所蔵は納得できるものである。

近畿例会

(令和四年度十月十五日)

「茶室建築をめぐる日本人の用材観 木材解剖学×茶室×精神」

田鶴寿弥子

天災は忘れたころにやってくるという言葉で有名な寺田寅彦の随筆「柿の種」には、庭におちた椿の花を見て感じたという彼の思いが描かれています。「植物学者に会つたとき、椿の花が仰向きに落ちるわけを、だれか研究した人があるかと聞いてみたが、たぶんないだろうということであつた。花が樹についている間は植物学の問題になるが、樹をはなれた瞬間から以後の事柄は問題にならぬそう

である。学問というものはどうも窮屈なものである。」このような言葉で、彼は学問の有り方に対し疑問を投げかけています。窮屈と形容されたそのような学問は今、分野横断型や学際研究という名前で、徐々に進められるようになってきています。

木材解剖学を専門とする私が行ってきている研究も、分野横断型・学際研究といえる領域に含まれます。何百年も前に生きた木が伐採され作られた仏像、建造物といった様々な木製文化財を対象に、それらから修理の際に得られる僅かな木片を顕微鏡や機器で覗き、その樹種や年代を明らかにすること、そして人間が木材と共に歩んできた歴史を、様々な分野の研究者らとともに紐解くことを目指し、日々奮闘しています。木材の樹種、つまり木の種類を明らかにする、というと、単に「材料」を明らかにするだけと思われがちですが、材料こそ当時の人々の文

化交流や木材観、民俗学的視座を紐解く上で、重要な知見になるのです。このような古代の人々の適所適材の用材観には、物性への理解（ハード）とともに人と木と間の精神的つながり（ソフト）が込められており、それを今再認識することでえられる知見こそ、高度成長を遂げる現代人に欠けている、本質を知る底力を再認識するための重要なヒントとなると考えています。

私は木材解剖学を軸に、考古・美術・建築・古気候など、様々な分野の研究者らとともに木を見つめてきましたが、寺田寅彦が記した「自然界と人間との間の関係には、まだわれわれの夢にもしらないようなものがあるのではないか」の言葉通り、文化財の材料調査によつて、はじめて見えてきた知見が昨今いろいろと見つかつてきています。

近年木彫像調査と並行して筆者が注力してきた研究が茶室建築で

す。国宝如庵、重要文化財裏千家住宅（今日庵）など数多くの茶室の修理工事に際して、従来の光学顕微鏡法に加え、極小試料でも樹種識別可能な放射光X線CTなども駆使して部材の樹種調査を行ってきた結果、茶室をめぐる用材認識について、面白い知見も見えてきました。

科学で文化財の樹種・年代を突き止め、美術史や考古学、歴史学の視座から見つめなおすことで、これまでは見えていなかった人間と木との関係を考察することができまます。本講演では、以上のような私が行ってきたささやかな研究の一部をかいつまんでご紹介させていただきますました。

（令和四年十一月十九日）

「堺衆と三好一族との文化交流
流 ―十六世紀前半の堺における連歌と茶の湯―」

宇野千代子

昨年、堺市博物館では、特別展

「堺と武将―三好一族の足跡―」（会期〓令和四年十月二十九日～十二月十一日）を開催し、千利休と同年に生まれた三好長慶（一五二二～六四）をはじめ三好一族と堺との関わりについて紹介した。

室町時代の堺については、町衆が自治を行った「自治都市」として、その政治体制が語られてきたが、近年では町衆と武家勢力が結んで町を治めていたことが強調されるようになっていく。茶会や連歌会は、町衆と武将たちとの重要な交流手段であったといえる。

長慶は茶の湯を好んだ様子はみられず、連歌を好んだことが知られる。連歌会の記録が三十数回残り、連衆の中には、河内屋宗訊、竹蔵屋紹滴、等恵、津田宗及ら堺衆のほか、辻玄哉といった堺に足場を持つ町衆の名が見える。竹蔵屋紹滴や津田宗及、辻玄哉は茶人としても知られる。

本発表では、三好長慶の連歌会記録に注目し、十六世紀前半の堺

における連歌の流行の様相や、長慶連歌会の連衆について見渡した。そして、津田宗達・宗及による茶会における定家色紙の使用について、三好氏や「阿波公方」方の武将、連歌師や連歌好士を招いた時の使用が多いことを指摘した。さらに、以下の疑問点を挙げ、今後、茶の湯と連歌を関連させつつ室町後期の堺の文化について検討していきたい旨述べた。

① 堺衆・竹蔵屋紹滴の役割

武野紹鷗以前、堺の茶の湯をリードしたのは、連歌も嗜んだ紹滴か。

② 武将・三好宗三の役割

天文十一年（一五四二）六月十一日に宗三が榎並で催した連歌会は、長慶連歌作品の初出。二十一歳の長慶が脇句を詠む。この会には宗訊や紹滴ら堺衆が参加している。長慶が堺衆と連歌を通じて交流するにあたって指導したのは宗三か。

金沢例会

（令和四年十月三十日）

「前田家と『鳴海織部窯耳付茶入 銘 餓鬼腹』」
木塚久仁子

加賀藩前田家旧蔵『鳴海織部窯耳付茶入 銘 餓鬼腹』（以後「餓鬼腹」と略す）に関する文献史料から、三代藩主前田利常（一五九三～一六五八）にとつての「餓鬼腹」の意義を検討した。

大正八年（一九一九）十二月一日、

『大正名器鑑』編纂のため「餓鬼腹」を前田利為邸（東京市本郷区）で実見した高橋箒庵は、「餓鬼腹の名は蓋し地獄草子にある、餓鬼の胸痩せ下腹張るによりておこりたるならん」と下部の張った姿に目を留めている。

命銘は小堀遠州（一五七九～一六四七）とされ、添状によれば、「織部が焼かせた茶入の中で、織部自身が茶の湯に用いたものはあるか」と尋ねた利常に、遠州は「まだらのある茶入がございました、

餓鬼腹によく似ていると私が銘を付けました」と答えたという。このため利常は京中を探させ、町人亀屋永仙が所蔵していた「餓鬼腹」を発見し、金五枚で購入した。これを知った遠州は、「高値がついたことを織部もあの世で喜んでいいことではない」と言ったという。

唐物に比して安価に取引されていた瀬戸や備前などの和物が、茶道具として正当な評価を得たことを遠州こそ喜んだのである。

利常は茶道具に関するあらゆることを遠州に相談し、利常の好みに応えて手段を講じてくれる遠州を厚く信頼していたことが、伝来する書状から判明する。遠州が懐かしんだ「餓鬼腹」だからこそ、利常は入手に執念を燃やしたと思われる。利常の茶人としての工夫や着想を遠州は受け止め、こうして育まれた利常の審美眼を代表するのが「餓鬼腹」ではないか。明和九年（一七七二）、加賀藩江戸藩邸の蔵が焼けたのち、当時「餓

鬼腹」を所有していた浜田藩主松井康福が安永三年（一七七四）、十一代藩主前田治脩（一七四五～一八一〇）に返贈したのは、利常遺愛の「餓鬼腹」ゆえと推測した。

例会のご案内

※例会の日程・会場等、変更する場合がありますので、ホームページまたは事務局までお問い合わせください。個人宛にメール等でのお知らせはしておりません。

東京例会

令和五年五月二十七日（土）

午後二時～

「十七世紀前半の千家における珠光認識」

荒井陽太郎

「小松宮彰仁親王の茶道具蒐集

―仙波家と伊木家を中心に―

依田 徹

令和五年十月十四日（土）

午後二時～

「未定」

下村奈穂子

「茶経」に関する二、三のこと」

岩間真知子

令和五年十一月十一日（土）

午後二時～

「古伊賀―破格のやきもの―」展

について（仮）

菅沢そわか

「裏千家の千猶鹿刀自の和歌について」

石塚 修

令和六年二月十七日（土）

午後二時～

「益田克徳の茶とその周辺 その

五」

神保乃倫子・八木京子

「織田有楽について（仮）」

西山 剛

静岡例会

（決まり次第ホームページにてお知らせいたします。）

東海例会

（会場：昭和美術館会議室）

午後二時～三時半

（開場午後一時半～）

令和五年四月二十九日（土）

惜春野点茶会

令和五年六月二十四日（土）

「鑑定の諸相について―極める！

江戸の鑑定」展に寄せて―」

加藤祥平

令和五年九月三十日（土）

「天目について」

長江惣吉

令和五年十一月二十五日（土）

「未定」

大槻倫子

近畿例会

令和五年五月十三日(土)

(会場：同志社大学 今出川キャンパス 至誠館S2)

午後二時～

「長谷寺の文化―茶道、連歌を中心として―」

久野由香子

*教室は変更になる場合がありますので、直前にホームページにてご確認ください。

北陸例会

令和五年九月十六日(土)

(詳細未定)

令和六年三月十六日(土)

(詳細未定)

金沢例会

令和五年六月二十五日(日)

(会場：金沢ITビジネスプラザ 武蔵)

午後一時半～

「茶室に用いられる自然素材につ

いて」

吉井 清

令和五年八月二十七日(日)

(会場：金沢市神宮寺町 蓮寺持明院)

午前九時半～

呈茶を伴う講演会(詳細未定)

令和五年九月二十四日(日)

(会場：金沢ITビジネスプラザ 武蔵)

午後一時半～

「茶書は語る(仮)」

原田茂弘

令和六年三月二十四日(日)

講演会(詳細未定)

高知例会

令和五年七月二日(日)

(会場：高知県立文学館 慶雲庵 茶室)

午前十時～正午

「茶の湯文化学会二〇二三年度大

会の研究発表をテーマとしたシンポジウム」

正午～午後四時

薄茶席 席主 二名

会費 五百円(参会希望者はご連絡ください)

令和五年九月三日(日)

(会場：高知県立文学館 慶雲庵 茶室)

午前十時～正午

茶の湯関係文献を読み所感の発表
「地域の茶人に学ぶ I」

令和五年十二月十日(日)

(会場：高知県立文学館 慶雲庵 茶室)

午前十時～正午

茶の湯関係文献を読み所感の発表
「地域の茶人に学ぶ II」

正午～午後四時

軽食茶事 席主 三名
会費 二千円(参会希望者はご連絡ください)

令和六年二月二十五日(日)

(会場：高知県立文学館 慶雲庵 茶室)

午前十時～正午

茶の湯関係文献を読み所感の発表
「地域の茶人に学ぶ III」

令和四年度

文化庁長官表彰

本学会参与、筒井紘一(八十二歳)、熊倉功夫(八十歳)両氏は、令和四年度文化庁長官表彰者に選定され、令和四年十二月に表彰されました。表彰理由は次の通りです。

筒井紘一(一社)文化継承機構代表理事、京都府立大学客員教授)茶道研究を専門とし、特に茶書に関する研究を大きく開拓した第一人者として、京都学園大学、京都造形芸術大学教授などを歴任、広く茶道研究の進展に貢献

している。また、茶人としての経
験を踏まえた茶道の啓蒙にも力を
入れるなど、多方面で茶道の振興
や普及に尽力している。

熊倉功夫 (MIHO MUSE
U M 館長) 日本文化史、特に茶
道史を専門とし、近世や近代にお
ける茶道史や、日本の食文化史に
関する学術研究の進展に貢献して
いる。また、茶道や食文化、生活
文化に関する一般向けの講演など
を永年にわたり行うなど、とりわ
け茶道の振興や普及に力を注いで
いる。

新刊紹介

『茶の湯を問い直す―創られた伝
説から真実へ―』

橋本素子・三笠景子編著 筑摩書
房 定価四、〇〇〇円 (税込)

『益田鈍翁―近代数寄者の大巨頭』
齋藤康彦著 宮帯出版社

定価四、九五〇円 (税込)

『茶の湯の茶碗』第二巻「高麗茶碗」
降矢哲男責任編集 淡交社 定価
六、三八〇円 (税込) (五月末ま
で刊行記念特別価格)

お知らせ

令和五年度

総会・大会・見学会のご案内
令和五年度総会・大会を左記の
日程で計画中です。詳細は令和五
年四月に郵送・ホームページにて
ご案内いたします。

総会・大会

日程…令和五年六月十日 (土)
場所…(東京)
テーマ…「江戸の茶の湯」

懇親会

日程…令和五年六月十日 (土)
(計画中)

見学会

日程…令和五年六月十一日 (日)
場所…護国寺

倉澤行洋先生への追悼の言葉
をお寄せください。

このたび、本会報にて二代会長
倉澤行洋先生への追悼文を掲載さ
せていただきました。次号も引き
続いて掲載する予定です。会員の
皆様からの倉澤先生へのお言葉を
募集いたします (五〇〇〜一〇〇
〇字程度)。令和五年五月十五日
までに学会事務局にお寄せくださ
い。

※二〇二三年度年会費を払込み
くださいますようしくお願
いいたします。

